

シリーズ
ここで生きてきた
ここで生きている
ここで生きていく



写真1 2012年のカレンダー「はたらく仲間のうた」に採用された「宇宙ステーション」。縦60cm、横90cmの木の板にアクリル絵の具で描いた。完成までに4カ月間を要したという。写真2 2009年のカレンダーに採用された「平和なクリスマス」。写真3 仕事の合間に描くため、完成までには数年掛かることもあるとか。写真は、5年越しで描いている作品。「あせるといい作品にならない」と、白石さん。

くさのみ福祉会
くさのみ作業所
廿日市市串戸五丁目3番22号
問合せ ☎②800

昭和61年、小規模共同作業所（無認可施設）としてスタートしたくさのみ作業所。その後、生活介護事業所、就労継続支援B型「ピクトハウス」、発達支援教室「くれよん」のほか、8つのケア（グループ）ホームを開設。「生きがいのある場所」を目指し、地域社会に貢献している。



いろんな人が、
それぞれの生き方で、
このまちで暮らしています。
平成23年10月1日号で
掲載した特集
ここで生きてきた
ここで生きている
ここで生きていく。
今後、シリーズ化し、
障がいがあっても、
このまちで頑張っている人を
不定期で紹介していきます。
問合せ 障害福祉課
障害福祉係 ☎⑨152

絵を描くのが大好き。
これからもたくさん描いて、
たくさんの人に見てほしい。

白石さんの作品は、作業所で
の仕事の合間に描くので、小さ
いものでも完成までに数カ月は
かかる。昨年、障がい者作業所
などの全国組織「きょうされ
ん」が主催するグッズデザイン
コンクールカレンダー部門で入
賞。コンクールは全国から14
38点の応募があり、30点が入
賞。白石さんの作品は、今年の
卓上版カレンダー「はたらく仲
間のうた」の10月の絵に採用さ
れた。

1歳のころ「ダウン症候群」
と診断された白石さん。学校を
卒業後、平成5年からくさのみ
作業所に通い始めた。作業所で
は、主に牛乳パックを再利用し
た「手すきはがき」の製作に携
わる。絵を書くようになったの
は、くさのみに通いはじめて2
年経ったころ。自分で書いたは
がきに描き始め、描く楽しさを
知ったという。

描き始めたころは、上手に描
こうとする意識が先行してしま
い、うまく描けずに苦勞したと
のこと。「自由にイメージして、
好きに描いてみたら」と作業所
の指導員がアドバイスしたとこ
ろ、それからは、気が楽になっ
てどんどん描けるようになった
という。

現在、描くキャンパスは、そこ
もっぱら木の板だそうで、そこ
にアクリル絵の具でイメージを
描き出す。木の板が一番描きや
すく、アクリル絵の具は色が豊
富で、塗りやすいとのこと。
自然の風景やファンタジーの
世界など、アクリル絵の具を使
い独特の画風で表現する。最初
に大きなイメージを頭の中に描
き、それをキャンパスに表現し
ていくという。「描いているとイ
メージがどんどん膨らんでい
く」という白石さん。たくさん
の色の中から、選び出される色
も白石さんの感性だ。

過去には、「きょうされん」
主催のコンクールなど、6回も
の入選経験も持つ。また、平成
16年には、同じく障がいのある
アーティストの内田志穂さんと
共同でエイブルアート（可能性
の芸術）展「内田志穂・白石裕
則の世界」を、はつかいち美術
ギャラリーで行った。

「絵を描くのが大好き。これ
からもたくさん描いて、たくさ
んの人に見てほしい」と白石さ
ん。
「白石さんの場合はたまたま
『絵』とめぐり合いました。誰
もが、必ず光るものを持って
います。人や地域との関わり
の中で、一人一人が輝いてほ
しいですね」と施設長の川本義
弘さんは話してくれた。



しらいし・ひろのり
白石 裕則さん
(39歳・四季が丘)

1歳のときに、「ダウン症候群」と
診断された白石裕則さん。
現在は、生活介護事業所「くさのみ作業所」に
通所している。
作業所で作る「手すきはがき」に絵を描きはじめてから、
その才能の花が咲いた。
障がい者作業所などの全国組織「きょうされん」主催の
グッズデザインコンクールで幾度も入賞。
日々、挑戦し続ける白石さんにお話を伺った。

シリーズ
ここで生きてきた
ここで生きている
ここで生きていく